

昨年度の高等部卒業生が、「放課後等デイサービス」についての想いを卒業前に作文で残してくれました。デイサービスの利用は、学校や家庭とは違う環境の中で多様な経験を積めたり、多くの仲間と囲まれて学齢期の社会性を身に付けたりできるよい機会になります。ぜひ利用検討の参考にしてください。

【私の大切な居場所】

令和6年度 高等部普通科卒業生

「加恋、俺はお前が目が見えなくなっても、他の子と同じように扱うし、他の子と同じ事をさせる。それが俺の信念だ。だから俺はお前にもみんなと同じ遊びをさせる。他の施設がやらせないような事もする。そうやって育ててきた。俺はお前のもう一人の親だ」～これは、私が通っている放課後等デイサービスの施設長さんから、よく言われた言葉です。

私は小学2年生から幸田町にある T というデイサービスに通っています。ここは、小学1年生から高校3年生までの子どもたちが、学校の授業後や夏休みなどの長期休暇に利用する施設です。体の不自由な子、知的障がいや発達障がいのある子たちがたくさんいて、目が見えないのは私一人だけです。それでも、私はとても気に入っていて、楽しく通っています。

私が T に通い始めたきっかけは、ここに通っていた子のお母さんに誘われたからでした。ちょうどこの頃、私の放課後の居場所を探していた両親は、さっそく見学に行き、職員さんの対応や施設の雰囲気が入り、決めたそうです。

今でこそ楽しく通っている私ですが、その当時は行くのが大嫌いでした。自分ではあまり覚えていませんが、学校や家に迎えの職員さんが来るだけで、嫌がって逃げ回っていたらしいです。今、振り返ればこんなことで逃げても、どうせ連れて行かれるのだから素直に行けばよかったのと思います。

私の行っているデイサービスは、他の施設とだいぶ違うらしいです。私は T

以外に行っていないので、他がどのような感じかは分かりませんが、職員さんが「ここは他の施設とは違う」と口癖のように言っています。

私がTの好きなところは、目が見えないからって特別扱いをしないことです。これは施設長さんのポリシーです。例えば「人生ゲーム」をみんなと一緒にすることがあります。点字は書いてありませんが、みんな親切に教えてくれます。また、私たちがここ数年、熱中していることに、ポケモンカードがあります。私もポケモンカードで遊びます。カードには点字は書かれていません。そこで、タックペーパーにカードの名前を打ったものを貼って使います。細かいルールは、周りの大人や仲間たちに聞けば、嫌がらずに教えてくれますし、自分でも大体のことは頭に入っているので、一人で戦略を考え遊んでいます。私はみんなと同じものを、みんなと同じように遊ぶのが大好きで、一番の楽しみです。

また、行事や遊びだけでなくTに行ってよかったと思っていることがあります。それは施設長さんたちが私たちのことを、我が子のように大事にしてくれることです。大事にしてくれるというのは、甘やかすということではありません。Tはむしろ厳しいと有名です。なぜなら施設長さんは、誰かが悪いことをすれば容赦なく吐きます。それが家庭や学校で起こったことでもです。私たち一人一人の家庭環境を把握し、親にもアドバイスをしているため、保護者たちからも信頼を置かれています。

小学生の頃、こんなことがありました。夏休みにお弁当を食べ終わった後、食べかすを掃除しないでそのままにして遊ぶことが何日も続いていたら、ついに私たちは施設長さんから1時間も説教をされました。その時、別の職員さんが



「加恋は目が見えないから、こぼすのはしょうがない」と言ったそうですが、「いや、目が見えなくっても、これは教えなければいけない事」と言って、私にも説教をしました。この時は「こぼしても分かんないのに、何で1時間も怒られなくちゃいけないの?」と理不尽に思いました。でも、成長した今考えれば、この時、怒られなかったら一生「こぼしてもよい」となっていたかもしれません。そう思うと、あの時、怒ってくれてよかったと思います。

私はあと少しでTには通えなくなります。今まで私を娘のように育ててくれた施設長や職員の方たち、兄弟のように一緒に過ごしてきた仲間と離れるのは寂しいですが、あと数日行ける日を楽しみに、一日一日大切にしていきたいです。

【宝島】

高等部理療科教諭

みなさんこんにちは。令和7年度がスタートして、まもなく半月が経とうとしています。新しい学部や学年での生活に慣れて、見通しをもって充実した毎日を過ごせているでしょうか。本校で新しい生活をスタートしたみなさんは、不安を感じながらもやっと落ち着いてきたという印象が少しずつでてきたのではないのでしょうか。

さて、そんな中で宝島を読んでいただくことになるのですが、この宝島は私の経験を中心に、その時に感じたことや振り返って整理した気持ちなどをまとめたものです。これまでの宝島をお読みになりたいと希望される方は、担任の先生に問い合わせてください。前回（令和7年2月）の宝島では、進路とは少し違う内容にしました。普通科の生徒2名から、感想文をいただきました。とてもうれしかったです。今後も進路に関する情報も含めて、みなさんとも視覚障がい者の身近な問題として共有できるような内容を時々載せていきたいと思います。本当にありがとうございました。

今回の宝島は、高等部普通科から専攻科理療科進学を決定する内容です。読んでいただければおわかりになると思いますが、今の自分ならおそらく100パーセント賛成はしなかったと思います。そのくらい当時の私は、深く・真面目に進路について、考える力がなかったのだと思います。この点も含めて読んでいただければ、みなさんの参考になると思います。

16 寄宿舎生活と後輩の一言

普通科の3年間は、楽しくて充実していました。しかし一方では、承認欲求が満たされない不満や、自己肯定感がもてないことなどに悩まされていました。自分の好きなことや夢を現実として可能かどうかを見極め、その進路に必要なとなるスキルを身に付けるといった、整然と整理された考えを普通科2年生の冬になっても確立できていない私でした。それなのに、やたらと消耗しているような疲労感を感じていたり、自分は誰



よりもきちんと向き合っているつもりになったりして、あたかも苦悩しているように振舞っていました。そんな私でしたから、周囲の状況に翻弄される日々が過ぎていくだけで、自分で決定できない力不足を周りの責任にして、「自分は考えている」という状況を作り上げるのに必死になっていました。学校では同級生や担任の先生に対する虚勢を張らなければならなかった一方で、寄宿舍ではまるで家庭のように少し気を抜くことができました。そして、寄宿舍での出来事が次の進路決定への大きな影響になっていました。寄宿舍だからこそ、関わることでできた保健医療科・専攻科の先輩、まるで友人の自宅に泊まりに行き、話し込めるような状態にあった毎日、それが煩わしく、つらく思えたこともありましたが、寄宿舍生活がなければ、進路決定はできなかったと思います。

高等部に進学してからは、寄宿舍で専攻科や保健医療科のみなさんと同室になりました。これまで以上に理療を身近に感じる場面が増えました。実技の練習台となり、あん摩やマッサージ、時にははりも受けていました。「とても心地よいなあ」と感じたり、「はりはやっぱ怖いなあ」と思ったり、いろいろな印象がありました。特に



印象に残っているのは、スポーツマッサージに興味をもっていた先輩が毎日オイルマッサージをしてくださったことです。たちまち、心地よさのとりこになりました。また一方で、専門科目に対するみなさんの取り組み方にも息をのんでしまう場面がありました。消灯後に自分のベッドの周りを洗濯物で囲み、明かりが漏れないように細工して深夜まで学習していたり、寝言で骨の名前や筋肉の名前をささやいていたり、入浴中もお経のように経穴の名前を暗唱したりする先輩がいました。私も定期試験の1週間ほど前になると必死で勉強していたつもりでしたが、それとは違う一生懸命さを感じていました。他にも、喫茶店を経営していたり、ホテルで料理人として働いていたりなど、いろいろな職歴をもつ先輩たちと話す機会も増えました。また、大学卒業後に専攻科を選択した先輩からは、大学の生活やサークル活動の話聞かせてもらいました。多くの内容が、当時の私には衝撃的でした。そしてあるとき、いよいよ進路を決定づける出来事が寄宿舍で起こりました。

1学年下に、第2期のアメリカ留学を目指している後輩がいました。私が動物

園からの手紙をもらった頃、その後輩とこんな話をしました。それは、アメリカ留学後の進路についての話でした。後輩は、理療科教員を目指すというのです。その思いはこうでした～ 中学部から盲学校に転校してきた後輩は、点字の習得やその他のことでも大変苦労したそうです。しかしその中にあって、先生を始め多くの友人が助けてくれたといいます。そこで感謝の気持ちから、自分も同じように苦労している人たちを助ける盲学校の教員になりたいと考えたそうです。そして自分が確実に盲学校で働くためには、理療科教員だという思いに至ったというのです。その話を聞いて、私は大変驚きました。第1期生としてすでに留学していた私の同級生は、英語を生かせる進路を目指したいと常に語っていました。私は同級生のように留学すれば、その経験を生かした進路を選ぶのが当然だろうと考えていました。しかも後輩は、留学は自分の経験を積むために応募するのであって、将来の職業につなげようとは考えていないと言うのです。話を聞いた私は、誰かに認めてもらうための進路や周囲から注目を浴びるための進路ではなく、自分自身がどうしたいのかが最も大切であることによりやく気づきました。しかも間近に迫る進路だけでなく、さらに将来を見据えた考えをもっている後輩にすっかり感心しました。私は今でもそういうところがあるのですが、物事の本質を理解して、それについて考えたり取り組んだりするのに時間がかかります。つまり、理解力が乏しいために、スタートが遅れるのです。私が大切なことに気づくことができたのは、その後輩のおかげでした。この後輩とのかかわりは、その後私にとって忘れられないものになります。そのエピソードについては、次回の宝島で触れたいと思います。



それからの私は、それまで以上に進路について考えるようになりました。ところが、「何を勉強したいのかも分からない」、「大学に入学できるような学力もない」、「それならやっぱり名古屋盲学校の専攻科を目指すしかないのか?」…など、なかなか考えをまとめることができませんでした。その中で一つだけはっきりしてきたことは、社会に出る前に名古屋盲学校以外のどこかで、経験を積みたいという気持ちでした。幼稚部から13年間、同じ仲間と同じ環境で慣れ親しんできたことはとても尊いことでした。しかし、成績の順位は小学部の頃からほとんど変わらない、子どもの頃の失敗を高校生になっても語り継がれる、い

つまでも教員や寄宿舍指導員から子ども扱いされているなど、今思えばどうでもいいようなことを当時は不満に感じていました。少しずつ考えがまとまってきたように思えるのですが、本質的な部分ではまとまらない考えにこれまで以上の焦りと苛立ちを感じていました。それは、進路決定の最終期限を迫る周囲に対する思いや、自身に対する「何かが違う」という煮え切らない思いなどが、うつうつと私の中で渦巻いていました。

そんな日々の思いを当時、曲にしていました。聴いてみてください。作詞、作曲、アレンジ、歌は私です。演奏は、キーボードを使って、データにした楽曲です。

『つばさ』

1 追いかけたけどなにもなかった 呼びかけたけど答えもない
それでもぼくは探し続けた 自分だけが信じるもの
自由と束縛の谷間をぼくたちは 止まらない時に乗り流れてゆく
空を舞うあの白い鳥が 空の青さに染まらないのは
精一杯つばさ広げ、このときを乗り越えているから

2 昨日までの空の広さ 今見上げる空の広さ
大きく見える昨日より今日 広がるだろう今日より明日
進んでいく道を選ぶのはぼくだから 自信がもてなくてもさあ飛び立とう
空を見上げる今のぼくも 夢を信じて歩くきみも
精一杯両手広げ、風をみかたに一步踏み出そう

空を舞う白い鳥も 空を見上げる今のぼくも
夢を信じて歩くきみも 秘めた思い抱えながら
精一杯つばさ広げ、広がる世界目指してゆこう

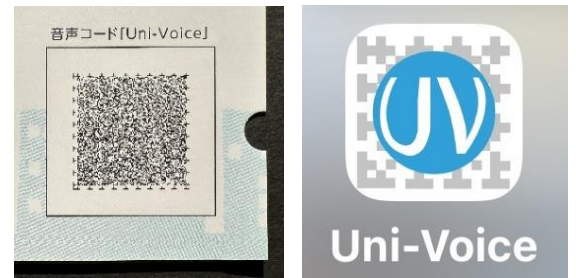


こちらの QR コードを、スマートフォンやタブレット端末等のカメラで読み込むと、楽曲を聴くことができます。

【 視覚支援デバイスの紹介 ～ Uni-Voice 】

進路指導主事

近年、一部の企業や官公庁から郵送・配布される書類の中に、半円の切欠きと一緒に「Uni-Voice (ユニボイス)」と書かれた2次元コードを目にすることがあります。これは、[日本視覚障がい情報普及支援協会]が開発した音声コードで、切欠き部分を目印にスマートフォンのカメラで読み込ませることによって、紙面の内容を音声で説明するものです。利用には専用のアプリケーションが必要ですが、誰でも無料でインストールすることができます。



現在では、電子眼鏡やスマートフォン等で文字を撮影して音声読み上げを行う視覚支援デバイスも増えてきましたが、新聞のような段組みのあるレイアウトや、チラシのように様々な方向に文字がデザインされた文章の読み取りはまだ難しく、音声変換の間違いも少なくありません。しかし、この Uni-Voice は、文字データとして情報をコードに入れているため、レイアウトが複雑な書類においても内容を正確に音声で伝えることができます。



Uni-Voice の2次元コードは、「年金通知」や「マイナンバー通知カード」、一部の「公共料金通知」や「障がい関連の申請書」など、生活するうえで特に重要な書類に付けられています。令和6年4月に障がい者差別解消法が改正され、すべての団体・事業所において、合理的配慮(※)の提供が「努力義務」から「義務」へ変更されました。そのような背景もあり、視覚障がい者への情報伝達についても今後、様々な方法で支援が拡大していくことが予想されます。

視覚障がい者のための支援デバイスは、今回紹介したもの以外にも、[歩行補助]や[色識別]アプリケーションなど様々なものが開発・運用されています。将来の生活の準備として、ぜひ今のうちに自分に合ったものや、必要なものの活用について情報収集し、機器操作の練習をしていきましょう。

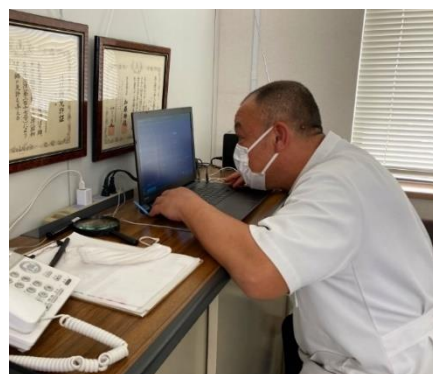
※合理的配慮とは、障がいのある方を含め、すべての人が社会生活へ平等に参加できるよう、障がい特性や困りごとに合わせて行う配慮のこと。

【点字と活字】

視覚障がい児・者にとっての点字は、教科書などの情報を確実に得られ、文法が理解しやすく、考えを整理するうえでも非常に優れた文字です。また身の周りの点字情報を暮らしに活用することや、点字本で趣味としての読書を行うなど、日々の“生活”や“学習”において活躍します。

その反面、一般社会における“仕事”に関しては、点字のみを使って行う業務はほとんどないのが現状です。特にデスクワークでは、視覚障がい者においてもパソコンを使用して活字（墨字）で文章を書けることが必須条件になります。たとえ点字出版や盲教育など点字を多く扱う職種でも、点字の読み書きができるだけでは仕事を行うことができません。

福祉施設においても、[名古屋ライトハウス]や[てのひら・陸]などの就労B型事業所が委託業務で行っている“文字起こし作業”では、全盲など視覚に障がいのある方が、会議録等の音声を聞き取りながら、パソコンを使って活字文章を入力しています。また就労A型事業所の事務職であれば、メール対応など文章を通して相手先とコミュニケーションをとる力が求められます。そして理療の仕事についても、パソコンを使って施術報告書やカルテ等の作成ができる あ-は-き師を望む傾向が強くなってきています。



パソコンを使った文字入力については、ディスプレイが見えない・見えにくい場合に、画面読み上げソフト（PC-Talker、NVDA、JAWS 等）を主に活用することになりますが、助詞や長音符、漢字の変換などは使用者自身で行わなくてはなりません。

例えば、「今日は盲学校へ行く」という文章を点訳した際のかな表記は、「きょーわ もーがっこーえ いく」となります。点字への変換については、基本的な点訳ルールを覚えることができれば、ほとんど間違えることはありません。しかし、この文章を活字にする場合、点字使用者が単純に長音符とスペースを抜いて口語表現のまま文字入力しようとすると、「きょおわもおがっこおえいく」とな

り、これに漢字変換をかけると、「居おわもおがっこ終え行く」という、ほとんど意味をなさない文章に変わってしまいます。

また、正しいかな入力ができたとしても、正しい漢字に変換されるとは限りません。多くのワープロソフトは使用者に合わせて漢字変換の予測学習を積み重ねていきますが、それでも名詞などは意図しない漢字に変換されることがあります。その場合は、間違いを自分で見つけ出し、音読・訓読の区別をしながら正しい漢字を探すことになります。例えば「こ」を「故」の漢字に変換したいとき、PC-Talker では「古墳のコ」、「戸籍のコ」、「固体のコ」、「故郷のコ」…等の音声選択肢から目的の漢字を選ぶ方法があります。最も基礎的な方法ですが、それでもこれを正しく行うには国語の知識だけでなく、使われる言葉の意味や熟語の成り立ちを理解するため、社会や理科などの幅広い知識が必要になります。

高等部の[産業現場等における実習]では、デスクワークで文字入力の業務を行う際、実習生の学力不足を指摘されることがあります。パソコンの入力には、キーボード操作などの技術的な知識が重要だと思われがちですが、それ以上に普段の教科学習で身に付ける力が大切になります。土台となる基礎学力の上に機器操作の知識が伴ってはじめて漢字が書けるようになります。そういった意味でも、日々の予習・復習で授業内容をしっかり理解して知識を身に付けておくことが、正しい活字文章を書くための近道と言えます。

また普段、スマートフォンやタブレット端末のみを使って文字入力をしている場合、パソコンへの移行に苦勞することがあります。直感的なインターフェースで操作しやすいタブレット端末ですが、まだ多くの事業所はWindowsをOSとしたパソコンを使用しています。将来的に理療や事務の仕事を希望している場合は、パソコン操作の練習について早めの取組が必要になります。自宅での学習とともに、中学部から参加できる本校のパソコン部や、視覚障がい児・者のための民間パソコン教室なども合わせてご検討ください。



アンケート

御感想や御意見、今後記事にしてほしい内容などがあれば、ぜひお知らせください。今後の参考とさせていただきます。

以下の QR コードを読み込んで、アンケートのフォームにご記入ください。

